研究課題：過去の作曲作品、歌曲「万葉参照Ⅰ」とピアノ作品「ピアノ・ソナタ第４番」の改訂、更にそれらの演奏上演と録音による、作曲技法の変遷を踏まえた創作の可能性の探究

１　歌曲「万葉参照Ⅰ」の改訂と上演。

この作品は2013年の作品で、今回と同じ「茨木新作音楽展」の第3回にて、同じ演奏者、坂本環（ソプラノ）と三好一花（ピアノ）両氏により初演されたものである。詩は全て『萬葉集』からのものである。「熱田津（にきたつ）に」「静まりし雷（かみ）ななりそね」「あかねさす紫野ゆき」「紫のにほへる妹を」「君待つと我（あ）が恋ひ居れば」「風をだに　恋ふるはともし」「海神（わたつみ）の豊旗雲（とよはたくも）に」の７篇を使用し、「君待つと」と「風をだに」は、相聞であることから音楽として一つの曲の中に組み入れた。全６曲である。

今日の日本の歌曲創作の世界には、先ず所謂「日本歌曲」というジャンルが存在する。そこには一定の様式があり、それは古典派からロマン派、フランス近代までの西洋クラシック音楽のそれで、ほとんどの日本の作曲家はその様式を踏襲している。一方、前衛的な音楽の歌曲（歌唱音楽）は、「歌曲」というジャンルには入ることのない、言わば実験的なものとなることが多い。

一方で、日本語を歌うということに関しては、その言語の特殊性との関係から、多面的に考察され洞察されるべき問題が立ちはだかっている。即ち、ひとつには、日本語というものが、古来、文明以前からといってもよい話し言葉としての言語と、大陸からの漢字文化との融合によって成立していること。それに連動して言葉は、音としてのイメージと意味としての言葉との狭間に存在していること。そして一方で、日本語の発音と、西洋音楽的訓練を受けてきた歌手の発声との間に齟齬が生じやすいこと。更に、日本語自体が、時代を経て変化し続けており、近くは戦後の文化統制によって単純化が推進されていること、等である。

『萬葉集』は、『記紀』と共に、書かれる言葉としての日本語の成立以前の文学である。よって、漢字文化にとらわれることもなく、更に意味もさることながら発音される音そのものに、かなりの表現の比重があるものと考えてよいのではないか。

独唱音楽の作曲を考え、言葉と文化の根底に立ち戻ろうとするとき、このような背景から、先ず題材として『萬葉集』が相応しいものと判断した。更に、音楽上は所謂「日本歌曲」の様式とも、前衛的様式（これも西洋に発するものだが）とも異なるものを模索した。

７年前の初演から、一度再演がなされたが、ピアノ・パートの変更と、歌唱方法の検討が必要と考えていた。更に時を経て新たな聴き手に享受してもらいたく、今回の改訂初演を行った。演奏は、同じ奏者によるもので、前回よりも解釈が行き届き深まったが、日本語にどのように作曲し、それをどのように歌唱するかという問題は、まだ完全な解決には至っていない。

２　ピアノ・ソナタ第４番「耳と目で」の改訂と演奏録音

この作品は、2010年に作曲し初演されたもので、その後も4回の再演を行ってきた。昨年より、ピアニスト中村和枝氏との関わりの中で作曲した私の全ピアノ作品を順次録音していく計画を進めており、その第2回目として、この作品を取り上げた。

現代音楽の様式は、楽器の豊かな響や大柄で効果的な迫力といった特性から距離を置いて成立している。ピアノ音楽に於いても、ショパンやリストのような様式の後継者は、非常に少ない。シマノフスキ、エネスコ、そしてソラブジなどが、ここでいうピアノ音楽の特性を活用した音楽を作曲した稀少な現代作曲家達である。

私は、ピアノ音楽の作曲にあたり、前衛音楽的な無定形(amorphism)楽想と、ここで述べるピアノの特性との融合を目指している。ピアノの特性を充分に生かした現代の表現は、上記の作曲家やアイヴズが実現しているが、私は、彼ら以上に無定形を導入し、瞬間に集中させる部分を多く設定しながら豊かで力強い響の効果に満ちた音楽の実現を目指したい。

今回の録音にあたり、先ず奏者の意向を聞き、数カ所に渡って演奏のしやすい形への改訂を行った。録音は、2日間に渡り、細部を録りなおしながら、進めた。15分ほどの音楽ではあるが、大変な難曲であり、

ミスのない演奏を実現して録音を残すには、2 日間、延べ 10 時間ほどが必要であった。

　この音楽は、今日珍しい様式のものであり、CD 化して広く発表することで現代のピアノ音楽に新しいフィールドを示すものとなると考えられる。